

本サービスにおける著作権および一切の権利はアイティメディア株式会社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスの出力結果を無断で複写・複製・転載・転用・頒布等を行うことは、法律で認められた場合を除き禁じます。

「英語に愛されないエンジニア」のための新行動論(16):

ホテルは“最後の戦場”である

<http://eetimes.jp/ee/articles/1303/28/news010.html>

たった一人で海外出張という名の戦争を行うあなたにとって、ホテルは、滞在を楽しむための場所ではありません。ホテルとは兵站(へいたん)拠点であり、作戦司令室であり、実は“最後の戦場”でもあります。今回の実践編(ミーティング準備[ホテル戦])では、ホテル選びの鉄則をはじめ、戦いに勝つためのホテル活用法をお伝えします。

2013年03月28日 08時00分 更新

[江端智一, EE Times Japan]

われわれエンジニアは、エンジニアである以上、どのような形であれ、いずれ国外に追い出される……。いかに立ち向かうか?→「[『英語に愛されないエンジニア』のための新行動論](#)」連載一覧

ノルウェーのホテルでのお話です。

100度を越えるサウナ室で、私は、氷点下のブリザードを体験していました。

『パンツを脱げよ(Take off your shorts)』

――聞き間違いじゃないよな。

いくら私の英語の能力が絶望的であったとしても、この程度の会話を聞き間違うとは思えない。何が悪かったのだろうか。やはり、ホテルを楽しもうとしたことが間違っていたのかもしれない。「パンツを脱げ」と言われた薄気味悪さに、ブリザード級の背筋の寒さを感じた私は、こう確信しました。

ホテルは、アミューズメント施設でもなければ、アメニティをエンジョイする場所でもない。

やはりホテルは、――最後の戦場だ。

ホテル＝「未来完了戦略」の最後の拠点

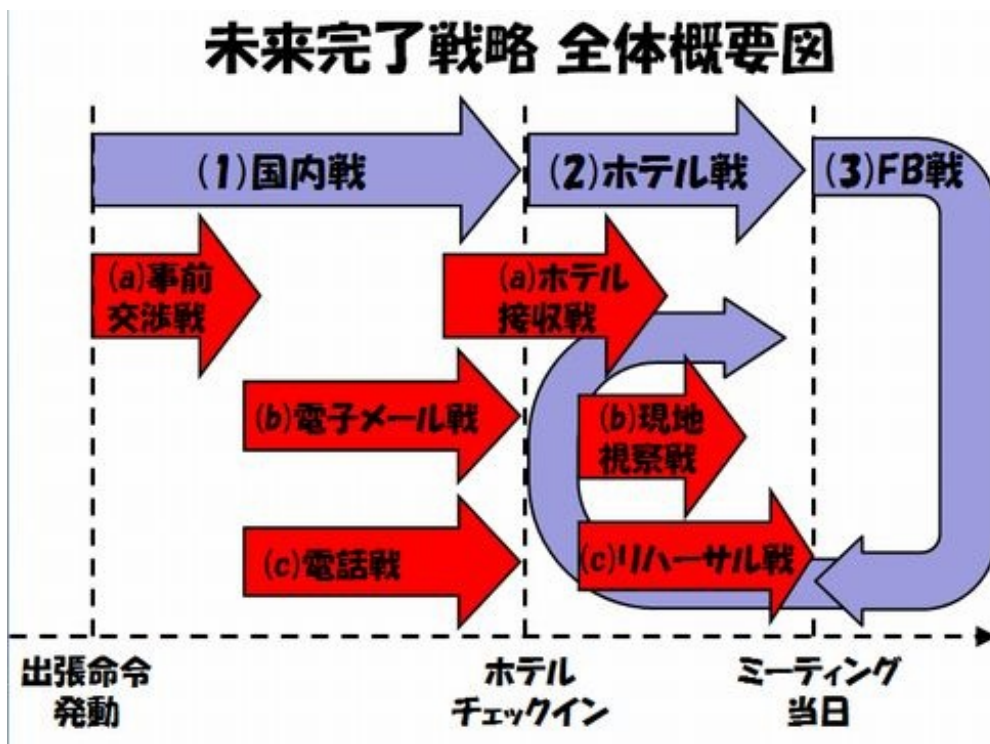
ミーティング準備編の前編では、「未来完了戦略」のうち「(1)国内戦」についてお話ししました。後編となる本稿では、「(2)ホテル戦」の話に入ります。

ホテルとは、「未来完了戦略」における最後の拠点、すなわち、

- (1) 兵站拠点の構築(宿泊施設[ホテル]の接收、ブリーフィングルーム化)
- (2) 戦闘の準備(食料、飲料水の確保、睡眠時間の確保、健康の維持)

(3) 戦闘の支援(事前調査、資料の修正、本国との連絡)

を行う拠点となります。



ホテル戦は、さらに「(a) ホテル接收戦」「(b) 現地視察戦」「(c) リハーサル戦」の3つに分けられます。

戦いを左右する、“拠点” 選び

まず、「(a) ホテル接收戦」においては、兵站拠点の特定、すなわち宿泊ホテルの選定を始めます。

言うまでもありませんが、日本にいる段階でホテルを選定しておく必要があります。この選定を旅行会社に丸投げしたら、その時点であなたの負けは決定です。兵站の拠点を人任せにするような兵士(兵站工兵)に勝利はありません。いわんや、現地でホテルを探すというのは、論外です。

最初に、訪問先の顧客のオフィスをGoogle マップで特定します。そして、その場所から半径4km以内のホテルを全てピックアップします。これは、交通機関の事故などが発生した場合でも、徒歩で1時間以内に到着できることを保証するためです。

次にホテルを特定します。当然、観光シーズンなどに当たった場合は、予算に見合わない高額な宿泊料金のホテルしか見つからない場合もあると思います。しかし、4kmルールは絶対と考えてください。兵站拠点と戦場の距離は短いほどよく、忘れ物があっても、すぐに取りに戻れるという安心感もあります。

なお、最近は電話だけでなく、インターネットでもホテルを予約できるなど、ずいぶん便利になりました。国際電話で予約の再確認(リコンファーム)をする必要も特にないでしょうが、予約の確認書のハードコピーを複数印刷して、全部の手荷物に突っ込んでおくといよいでしょう。

チェックインは、日本人に対する“誤解”を活用する

次に、その特定した兵站拠点の接收(チェックイン)を行います。

私の経験上、海外でのホテルの予約は、日本では考えられないくらい、かなり高い確率で失敗するか、その予約の内容が勝手に変更されているのが常です。予約のハードコピーを見せても、ホテルのフロントは、平気で「申し訳ないが満室だ」といい、さらにひどいホテルになると「そんな予約は知らん」と言い張ります。

「英語に愛されないエンジニア」である私たちが、その資質を最大限に発揮できる場面はここです。

何を言われようとも、みじろぎせずに、じーっとフロント係の目を見つめます。無感動な目で、感情を表わさないように、そして何もしゃべってはなりません。「私は、あなたのしゃべっている英語がさっぱり分かりません。さっさと部屋のキーカードをください」と目で語ればよいのです。



「無表情な日本人が何を考えているか分からない」という認識(誤解)は、先人達の努力(黒澤映画、カラテ、ニンジャ、武士道に関わる各種のコンテンツ)によって、ある程度グローバル化されています。

例えば、私の場合、米国で目をつむって考え事をしていた時に、「瞑想(meditation)されているんですね」と(ウルウルした)憧れの目で言われたこともあります。上海、デリー、ロンドンでは、合気道の構えをして正面からにらみつけただけで、やばそうなアンチャンたちを追っ払えたこともあります(ただしこれは例外。正解は「逃げる」です)。私の同僚の一人は、米国で「お前たちは日本人というだけで、『強い』と思われる。ズルいではないか」と言われたそうです(本当)。

このような、日本人に対するインターナショナルな誤解は、積極的に活用(悪用または濫用)すべきです。

“作戦司令部”を作る

チェックインによってホテルの接收が完了したら、次はホテルの部屋の“作戦指令室化”です。

まず、ノートPCを起動して、大本営のシステム(本社の業務システム)との接続を確認します。

なお、ホテルのポータルサイトからパソコンにウイルスが侵入したという話はよくあります。セキュリティソフトのレベルを最上位にすることも忘れないようにしましょう。あと、ノートPCなら2台は持ち込みたいものです。複数の作業ができるというメリットもありますが、2台あれば作戦指令室にいるような気分になれるからです。

次に、国際携帯電話から日本に電話をかけられるか確認します。たぶんマニュアル通りの番号では動きません（動いた試しがない）ので、何度かパターンを変えて見つけます。具体的には、国際ローミング番号や、国番号、先頭に"0"を付ける/付けないなど、色々なバリエーションを試す必要があると思います。

また、その国の国内電話のかけ方は、滞在しているホテルの予約受付番号でも使って調べましょう（誰かが電話に出たら、何も言わずに切ってしまうって構いません）。

拠点/戦場ルートは、自分の足で確認すべし

次は、「(b) 現地視察戦」です。兵站において、戦場の視察は必須です。具体的には、訪問先の会社までのルート確認と下見を行います。

往路は交通機関を使って、復路は徒歩で確認しましょう。きちんと時間を計測しておくことも重要です。当日に電車などの乗り換えに手間取った場合、英語で誰かに尋ねるしかありませんし、英語が通じない国では手の打ちようがありません。

当日空港到着→顧客直行という場合なら、1～2時間の余裕を持って顧客ミーティングの場所に行っていきましょう。近くのカフェで、資料を読み込んでいればいいのです。

“口が勝手にしゃべる”ほど練習を積む

最後が「(c) リハーサル戦」です。

下見が終わったら、ホテルに戻って、資料の読み込みとプレゼンテーションの練習を行います。これが、「兵站重点型の戦争」の後半の肝になります。

プレゼンテーションを行うことになっているのであれば、自分の頭がパニックで飽和状態になっても、「口が勝手にしゃべっている」レベルになるまで繰り返し練習してください。もちろん、声を出し、そして身振り手振りも加えます。私は、ホテルの部屋の中で最低でも20回、最大100回は繰り返し練習します。

なぜか。

私には、プレゼンを行っている最中に思いついたフレーズを、的確な英語のフレーズに変換する能力がないからです。また、繰り返しているうちに、自分の英語の変な言い回しに気が付くこともあるからです。この場合は、印刷した資料に、気になったことを片っ端から書き込んで、しゃべる内容をどんどん変更しましょう。場合によっては、資料そのものを変更することもあります。

これは「よりよいプレゼンテーションを行うため」ではありません。

私は、プレゼンテーションを「良い/悪い」などという次元で行うほどの実力がありません。この目的は、「プレゼンテーション資料の最後のページまで説明し切る」という、その一点にのみ集約されています。

そして、このプロセスで行っておかなければならないことは「想定質問リスト」の作成です。プレゼンの練習を何度も何度も繰り返して、覚え込みが安定してくると、「ここで、このような質問で突っ込まれる」というカンみたいなものが働いてきます。これが見えてきたら、しめたものです。より高度な戦略シミュレーションへ移行することができます。その解答を「英語」で準備しておけばよいからです。

なお、修正した資料を、顧客に送付することも忘れないようにしましょう。

忘れちゃいけない、食事戦と安全衛生戦

それ以外の戦闘についても、付け加えておきます。

「食事戦」では、個人差があるので一概には言えませんが、私の場合、近くの店でサンドイッチ、ビール、ミルク、サラダなどを購入して、一人、ホテルの部屋で食事をするのが好きです。時間をかけてのんびり食べられますし、メニューを読んだり注文したりすることにエネルギーを使いたくないからです。

緊張などで食欲がなくても、何か口に入れるようにしてください。エネルギーを取り入れていないと、現地で簡単に故障（病気）してしまいますから。

「安全衛生戦」では、日本との気候の違いから、体にいろいろな変調が生じてくることを予測して、各種の準備が必要です。私の場合、常備薬専用の布袋を用意して、その中にさまざまな種類の薬を放り込んであります。

準備する常備薬の目的は「治癒」ではありません。「痛い」「苦しい」といった痛覚、苦痛の「遮断」が目的です。

具体的には、

- どんな激痛も全く感じなくなる強烈鎮痛剤(→ただし、直進歩行が不可能[蛇行]になってしまう)



写真はイメージです



写真はイメージです

- 7時間は完全に意識を失わせる睡眠薬(→ただし、もしホテルで火事が起きたら、それは死を意味してしまう)
- どんな下痢でも完全に停止させる整腸薬(→ただし、ウイルス、細菌の体外放出も妨げてしまう)
- じんましん、花粉、ありとあらゆるアレルギーの症状を沈黙させる抗アレルギー剤(→ただし、免疫機能も破壊してしまう)

という薬が入っています。

これらの常備薬の入手経路は明らかにできませんが、まあ、世界中にはいろいろな薬物マーケットがある、ということで、あまり深く突っ込まないでください。

痛覚、苦痛を「遮断」して、兵士(=自分)を現地に戦力として送り込むことができれば、兵站としての役割は十分です。なにせ、「現地で医薬品を購入」「現地で医者にかかる」というような、想像を絶する面倒に関わりたくないのですから。



写真はイメージです

なお、兵站拠点であるホテルで“やってはならないこと”も羅列しておきます。

ホテルアメニティである、プール、サウナなどの利用はお勧めしません。面倒なことに巻き込まれることもあるからです。

作戦(出張業務)が完了するまでは、観光などもやめておいた方がいいでしょう。ミッションが終了するまでは、業務に集中しておいた方がいいということもありますが、海外は危険と面倒

であふれ返っているからです(付録1参照)。

絶対に「火器」では撃ち合わない

最後は「(3)フィードバック戦」になります。

これについては次回紹介しますので、ここでは簡単に要点のみ述べます。

重要なのは、ミーティングにおいても、議論をせずに、議論の内容をホテルに持ち帰ることです。私たち「英語に愛されないエンジニア」が、議論――すなわち最前線において火器で撃ち合う――になったら勝ち目はありません。

その日の戦いはドローに持ち込み、議論の内容を持ち帰ってホテルで検討する、または本国の大本営(職場の上司や同僚)に相談するという、前半の「(1)(b)電子メール戦」のホテルバージョンを実施すればよいのです。

□

それでは今回の内容をまとめます。

海外出張における戦い方として、「未来完了戦略」を提案します。

「未来完了戦略」とは、本来ミーティングで実施すべき事項を、ミーティング直前までに「完了」させるといふ、「英語に愛されないエンジニア」に特化した戦略です。

この戦略による戦闘は、海外出張命令の発動からミーティング前日までの全期間にわたって実施され、「国内戦」「ホテル戦」「フィードバック戦」にフェーズ分けされますが、その目的はただ一つです。

私たちが不得手とするリアルタイム系の英語の「会話」によるミーティングを回避して、得意とする非リアルタイム系の英語の「読み書き」による戦闘に持ち込むことにあります。

□

次回からは、いよいよ本連載の本丸、「プレゼンテーション編」に入ります。

今回、お話した「未来完了戦略」による戦闘を、有効かつ直接的に、ミーティング当日のプレゼンテーションに連結する方法について論じたいと思います。

(付録1)ナゾの「ちんちんおじさん」～海外は危険と面倒であふれ返っている～

IETF (Internet Engineering Task Force) ミーティングの2日目は、夜の9時まで行われました。その後、会食などの予定も全くなかったため、私はホテルの最上階にあるサウナに向かいました。

周りのメンバー（日本人）も誘ってみたのですが、あまり興味がないようでしたので、私は部屋の浴室のタオルを一枚つかむと、一人で最上階行きのエレベータに乗りました。

エレベータから降りると、いきなり無機質なロッカールームが現れ、そこから「サウナ」と書かれた矢印をたどって奥の廊下を進んでいきました。ドアの前で、サウナが男性用であることを確認してから脱衣室のドアを開けると、そこにはとんでもないものが転がっていました。

太った、というよりは、はっきり言って太りまくって肉がぶよぶよした白人の男性が、体を仰向けにして、火照ってピンク色になった肌をさらしながら――「ちんちん」を天井に立て、そして時々「ちんちん」をいじりながら（“いじっていただけ”です。念のため）――、サウナのクーラー通気口の上に寝そべっていたのです。



写真はイメージです

それは、私の人生で三本の指に入る、醜悪な光景でした。

私は内心びっくり仰天して、すぐさま180度回転してその場を立ち去りたかったのですが、この程度の異様な光景に動じる風を見せることは、自分のプライドが許しませんでした。

「ふふん。俺はなあ、この程度の異様な光景には何度も立ち会ってきたんだぜ」と強がりつつ、「自分で自分に言い聞かせても仕方がないだろう」と自分に突っ込みながら、わざと平静を装って、そのままサウナ室に入っていました。

しかし、脱衣場の中に、「ちんちん」をいじりながら寝そべる白人男性と、私しかいないことを確認するまで、それほど時間はかかりませんでした。私は新たな恐怖に襲われましたが、(大丈夫だ、智一。お前は合気道の有級者(5級)*¹⁾じゃないか、大丈夫、大丈夫)と自分に言い聞かせながら、私は服を脱ぎ出しました。

*1)先輩のNさんに「お前なあ、『有段者』という言葉はあるが『有級者』って言葉はないぞ。せめて『経験者』くらいにしておけ」とアドバイスされました。

日本から持ってきた文庫本を読みながら、狭いサウナ室で汗を流していると、あの「ちんちんおじさん」がサウナ室に入ってきました。私は本に集中しているふりをしながらずっと無視していたのですが、数分が経過して、「ちんちんおじさん」が何気ない風に口を開きました。

ちんちん:"Hot!"(熱いなあ)

こういう状況で口をつぐみ続けることは、難しいのです。(くそっ、やっぱりしゃべりかけてきやがったか!)と思いつつ、私も仕方なく答えました。

江端 : "Too hot"(熱すぎますね)

これに気をよくした「ちんちんおじさん」、私にいろいろと聞き始めました。

ちんちん:『インターネットの国際会議に出席しているのか』

江端 :『そうだが、あんたも?』

ちんちん:『いや、私は別の会議だ』

「明日会議で出会ったりしたら面倒くさいったらありゃしない」と思っていたので、私はほっとしました。

ちんちん:『日本人だろう。私はカナダ人だ』

江端 :『この国は始めてか?』

ちんちん:『いいや、2回目だ』

というような、どうでもよい会話をしばらく続けた後、少し会話が途切れたので、私は再び文庫本の方に目を落としました。

ちんちん:『どうしてお前はサウナでパンツ(水着)をはいているんだ』

「お前の知ったことか!」とも思いましたが、私は一応丁寧に答えてやりました。

江端 :『サウナの後にプールに入るつもりだ。だからパンツ(水着)をはいているのだ』
ちんちん:『プールは既にクローズしているぞ』

私は一応プールが開いている時間を調べてきていましたので、驚きました。後で調べたら、やっぱりプールは営業時間内でしたが。

江端 :『そうか。でも一応行ってみようと思う』
ちんちん:『プールに入れないのだから、パンツ(水着)を脱げよ(Take off your shorts)』

来たか! やっぱり来たか!! 最初からそうなるとな気がしていたんだ。

私は驚きつつも、心のどこかで自分の予想が当たっていたことに感心していました。

ちんちん:『暑苦しいだろう。パンツを脱いだら楽になるぞ』
江端 :『いや、俺はこのパンツが好きだ(I like this shorts)。このパンツは快適だ(I feel comfortable this shorts)』

「くだらない英語をしゃべらせるんじゃねえ!」と私は笑顔のままで半分以上怒っていましたが。それでも、ちんちんおじさんは、執拗(しつよう)に『パンツを脱げ』とせかすので、私は話題を変えるために言いました。

江端 :『私はサウナが大好きなので、私の友人をこのサウナに招待した(I invited my friends this sauna)。すぐに彼らはここにやってくるだろう』

そう言うと、「ちんちんおじさん」は、ちょっと首をかしげた風にした後、そのままサウナ室から出て行きました。

□

今になって考えると、あの「ちんちんおじさん」は、親切心で「パンツ(水着)を脱いだほうがサウナを楽しめる」と私にアドバイスをしてくれたのかもしれませんが。

しかし、百万歩譲って、あのおじさんが変態でも同性愛者でもなく、単に親切な人物であったとしても、私は外国人の他人に対して「パンツを脱げ」と言うような文化など、断じて認めるわけにはいかない、と思うのです。

江端さんのひとりごと「[IETF惨敗記2\(白夜のノルウェー編\)](#)」より抜粋

本連載は、毎月1回公開予定です。[アイティメディアID](#)の登録会員の皆さまは、下記のリンクから、公開時にメールでお知らせする「連載アラート」に登録できます。



Profile

江端智一(えばたともち) [@Tomoichi_Ebata](#)

日本の大手総合電機メーカーの主任研究員。1991年に入社。「サンマとサバ」を2種類のセンサーだけで判別するという電子レンジの食品自動判別アルゴリズムの発明を皮切りに、エンジン制御からネットワーク監視、無線ネットワーク、屋内GPS、鉄道システムまで幅広い分野の研究開発に携わる。

意外な視点から繰り出される特許発明には定評が高く、特許権に関して強いこだわりを持つ。特に熾烈(しれつ)を極めた海外特許庁との戦いにおいて、審査官を交代させるまで戦い抜いて特許査定を奪取した話は、今なお伝説として「本人」が語り継いでいる。共同研究のために赴任した米国での2年間の生活では、会話の1割の単語だけを拾って残りの9割を推測し、相手の言っている内容を理解しないで会話を強行するという希少な能力を獲得し、凱旋帰国。

私生活においては、辛辣(しんらつ)な切り口で語られるエッセイをWebサイト「[江端さんのホームページ](#)」で発表し続け、カルト的なファンから圧倒的な支持を得ている。また週末には、LANを敷設するために自宅の庭に穴を掘り、侵入検知センサーを設置し、24時間体制のホームセキュリティシステムを構築することを趣味としている。このシステムは現在も拡張を続けており、その完成形態は「本人」も知らない。

本連載の内容は、個人の意見および見解であり、所属する組織を代表したものではありません。

関連リンク

[筆者の個人Webサイト「江端さんのホームページ」](#)

Copyright© 2016 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

